

# 夜明けの歌

田畑彦

。 静岡の母からの電話は、いつもながかった

それは、いまにもすぐに終りそうदैいて、  
その終りそうなところから、次々と新しい話  
題が雑草のように生えて来て――もつともそ  
れは、母にいわせれば、お前たちのおかげで  
ということになるのだがつぎつぎに生まれて  
来る心配事、ということになるのだが――そ  
れが見る間に庭一面を覆ってしまう、といっ  
た光景を連想させた。

それは、地方都市といつても、いまでは東

京の生活とちつとも変らない彼女の故郷の、どこか海水の浸食にも似た日々の変貌を彼女に髣髴とさせることもあったし、また、そこに生きる母の平凡な人生、本人にとってみれば、恐らく幸福よりも不幸の量の方がちよつと多いような平凡な人生の縮図と思わせることもあった。

そのとき、美和子は顔にパツクをしたばかりだった。おまけに、部屋には箆笥から洗いざらい引き出した着物が、いっぱいに散らばっていた。それは、畳の上だけでなく、隅のベットのの上にも、鏡台の椅子の上にものつていた。

電話が鳴ったとき、彼女は手に持った最後の一枚を、一時、どこに置こうかうろろした。結局、それをベットのの上に放り出した。それから、つま先で着物をふまないように気を配りながら隣りの部屋まで行って、電話に出た。それで、電話に出るのが少し遅くなつた。

「どうしたの、何かしてたの？」

その美和子の耳に、母親の聲がとび込んだ。  
。

「別にイ・・・」

美和子は、いった。

塗ったばかりのパックが気になって、あまり口を動かさないようにしゃべったので、くぐもった声になった。彼女は、いつも電話にとんで出て、それが男の声ではなしに女の声だとわかると、ほっとすると同時に、少しがっかりする。母親の聲は、女としては低い方で、それにあまり抑揚がない。美和子が母親のなかでいちばん好きになれない部分の一つで、それでいて、どうゆうわけか他人がきくと彼女の声とどこか似ているらしく、ときどき「あなたの声かと思ったわ」と、女学校時代からよく友人たちに間違われたことがある。

。「いまパックしたばかりなのよ。それでちよつとしやべりにくいだけ・・・」

「あら、もうそんな時間、そんなに早くから支度にかかるのかい？　じゃあ、もうちよつと早く電話すればよかったね」

母親は、そういったが、別に電話を切るという気配はなかった。

美和子は、顔のあたりの皮膚の一部に、指先をちよつとあててみた。さつき塗ったばかりの液体が、あまり愉快とはいえない感触を返して来た。

「別に用事ってわけじゃないんだけどね、この前の電話のことが気になってね、それでどうしてるかと思って・・・」

「どうしてるって・・・」  
美和子は、いった。

「どうもしてないわ」  
それから美和子は、つけ加えた。

「いつもとまったく同じだよ」  
まったく、というところを特に強調しようと思ったが、パックのせいでうまくいかなかった。

「お前のことじゃないよ。あの人のことだよ。あの人はどうしているのよ」

母親は、いった。

「だから、どうもこてないわ。いつもとまったく同じだわ。・・・しいていえば、散歩に行っているわ、いま、犬と一緒にね。・・。」

「犬と一緒に？　犬と一緒にって、それどうゆうこと？　・・。」

「あら、話してなかったかしら、犬を飼ったのよ。もう二月以上前になるわ。とても可愛いわよ、シーズーという犬で。・・。」

「シズ？　変な名前だね。まさか買ったわけじゃないんでしょ」

「買うわけなんかないじゃない。あの人が貰って来たのよ。正確にいえば、飼ってもらって来たんだわ。ほら、むかしチン飼ってたの憶えてるでしょ、シーズーも中国犬で、けどチンみたいに鼻ぺちゃじゃないの。血統書もちゃんとあるのよ」

「血統書だなんて、じゃあ買ったらずいぶん

するんでしょ、大丈夫なの、そんな犬飼って・・・」

「犬飼うぐらい、だれだってできるわよ」

美和子は、つい二週間ばかり前母から借りた二十萬のことを思い出して、いった。月末までに返す約束だった。店に入れなければならぬ客の売上代金で、そんなふうにして、美和子は客から金が入るまでの穴埋めの金を母から借りた。たいてい、二十萬、三十萬という金で、母親はそのたびに「本当に返せるんだね、大丈夫だろうね」と、きまつたように念を押した。

「それにいまは、ドックフードだってあるでしょ。あれだけやっておけば、十分なのよ」

美和子は付け加えた。

受話器の向うで、母親がため息をつくのがきこえた。

「いやになっちゃうねえ、本当に・・・」

母親は、いった。

「もつとまじなものを持って来ることは出来

ないのかねえ。あの人は・・・」

「もつとましなものはよかったわねえ、お母さん・・・だけどわたしだって、驚いたのよ。最初は・・・だって、あの人ったらいきなり黙って仔犬だけ家に置いておくんですもの。夜店から帰ったら、知らない仔犬が部屋でないてるんでしょ、びっくりしちやったわ」

「犬も猫もきらいだよ、私は・・・。こっちじゃ相変らず行男が猫を拾って来てるけど・・・」

「あら、行男も相変らずなの？　むかし飼う飼わないで、お母さんとずいぶん喧嘩してたじゃない」

「それが、お前、いまは二匹もいるんだよ。絶対階下に降りて来させないよにいつてるんだけどね。二匹とも野良猫で、どこから拾って来たんだよ。本当に、いい気なもんだよ。自分は店を失敗して、子供たちも満足に養えないで、親ん家の二階に一家で居候しているっていうのにさ・・・」

「あら、猫ぐらいいいじゃない、お金がかかるわけじゃないし・・・それに二階だつてそのために建増したんでしょ・・・」  
「だれも飼っちゃいけないなんていつちやいないよ。ただお前たちを見ていると何だか私ひとりでやきもきしている感じでさ、おまけにお父さんまでぱつとしないだろ、本当に、やつきりしちやうよ」

「やつきりしちやうつて・・・」

美和子も、つい母の方言につられて、いった。  
た。

「やつきりしちやうのは、何もお母さんだけではないわ。私だつて同じことよ」

「そりやあ、そうだろうよ。だから、いつてるじゃないの、あの人はいったいどうしているんだつて・・・」

母親の声が、少し高くなつた。

「だいたいお前は人が好すぎるんだよ。考えでもごらんよ、最初の亭主は借金し子供だけ残してどこかへ行つちやうし、今度は、あの



人だろ。お前さえ水商売に出ているんでなければ、私は絶対に賛成しなかったんだけどね。あの人だって、いい加減だよ。ぼくと一緒にになったら、絶対に水商売に出すよう真似はしません、なんていっておいでさ・・・」

「むかしのことなんか、どっちだっていいじゃない、お母さん」

美和子は、さえぎった。

「あの人だって、何も最初から嘘をつくつもりだったわけじゃないのよ。あの人が事業やっていたころは、わたしだって店に出ることはなかったじゃない」

「そりゃ、たった一年の話じゃないの、お前。たった一年だよ。それからお前は何年あの人と一緒にいるんだい？」

「さあ、十年かしら、二十年かしら、もう忘れちゃったわ。だけどそれは全部が全部あの人が悪いわけではないわ。あの人運もわるかったのよ。時勢も向いていなかったのよ」

「ふん、そうかねえ、そうゆうもんかねえ。」

なにもお前がそういうんなら、それでもいいんだよ」

母親は、不承不承、合槌をうった。そして、どうしたわけか、もつとむかしのことに溯った。

「だけど、私は思うんだよ。お前は、本当は、もつともつとずっといい星のもとに生まれていたんじゃないだろうかってね。お前は、女学校時代は、本当にいい娘だったもんね。学校の成績もよかったし、器量もよかったし、親のいうことはよくきいたし、本当に親の目から見ても、なにひとつけなすところのない娘だったよ。それが、あの結婚だろ・・・お前は、どうしても借金を返すんだって、反対を押しきって東京に出て水商売に入るし、なにもかもがたがたになってしまっただけ・・・」

「そうよ、だけどあときは、反対はしてたけど、お母さんたちだって、そうしななければ困ったんじゃない。家が差し押えを受けるか

も知れないって、おろおろしてたじゃないの  
「  
「そりゃ、当り前だよ。やれ保証人になって  
いるだの、担保に入っているだのって急にい  
われたって、私たちには何をどうしていいの  
かさっぱりわからないものね。お父さんだっ  
て魚屋以外のことは何も知らないし、私たち  
はただ毎日をまじめに働くことだけで勢一杯  
なんだからね。ひと様に迷惑をかけたことも  
ないし、かけられたこともないし、それで十  
分だったんだからね」  
「それは、わたしだって同じことよ。もっと  
も、おかげさまで、いまでは世間の裏のこと  
もいろいろ憶えさせてもらったけど・・・ほ  
ら、憶えている？ 健が生まれた日、債権者  
たちがどっと病院に押しかけて来て・・・」  
「憶えているよ。病院にいるはずのお前が、  
青い顔をして生まれたばかりの健をだいて家  
にやって来てさ・・・本当に、何事が起った  
のかと思ったよ」

「その健が来年高校なんですものねえ、お母さん・・・本当に夢みたいだわ」

美和子は、いった。

いいながら、もう一度そつと顔のあたりに指をやつて、パツクの具合を試してみた。

「そうだねえ、本当に何か悪い夢の続きをみてるみたいだねえ・・・」

受話器の向うで、母親のいつているのがきこえた。

それをききながら美和子は、まだ少し指先にべたついた感じの残るパツクを、そつと顎の方からはがしにかかった。よく用心してかからないと、乾いていないパツクがあちこちに残つて、後で面倒なことになる。

「え、なに？　なんていったの」

母親の声の調子が変わったのに気がついて、美和子はいった。

「あの人のことをいったんだよ、あの人のことを・・・」

母親の返事が、すぐに返つて来た。

「昼間から犬を連れて散歩だなんて、本当にいい御身分だね、って。いったいどう思ってるんだらうね、あの人は・・・自分の家や、女房のことを・・・」

「どう思うって、別にどうも思っていないでしょ」

右側の顎を終わって、今度は左側の顎に指をはわせながら、美和子は、いった。ちようど蛇の抜殻のように、そっくりパックを剥がすには、パックが途中で破れないように、慎重にやらなくてはならない。そうすると彼女の眼と鼻と口の形だけの穴のあいた、彼女の顔の抜殻ができる。

「それで、出版社に持って行ったとかいう小説の方はどうなっているんだい？ お前の話じゃ、今度はうまく雑誌にのるかも知れないっていったじゃないの」

「あら、そんなこといったかしら・・・それもよくわからないわ。彼が小説を書きあげたなんて、本当に久しぶりのことなんですもの

。それに出版界は、いまもうれつ不景気なん  
ですって、彼のかくような小説は、どの雑誌  
もなかなかのせないんですって。」

「それじゃあ、そんな小説書いたらっはじま  
らないじゃないの・・・で、その小説がもし  
その出版社とやらでのせてくれたとしたら、  
そしたら少しは楽になるのかい？」

「楽になんかなるもんですか、そんなの雀の  
涙よ。彼の書くような小説の原稿料って、と  
っても安いだよ・・・だけど、断っておくけ  
ど、犬の散歩は何も彼の責任じゃないわ。わ  
たしが頼んだのよ。一日一回は犬に散歩させ  
ないと犬がいらいらしてヒステリーを起すん  
ですもの・・・」

「犬のことなんか、どっちでもいいよ」  
母親が、いった。

「要は、お前がそれでいいんなら私だって  
どっちでもいいんだからね」

「どっちでもいいなんて、いってないわ」

顎の部分からはじまった作業は、最後に額

の部分を残すだけになっていた。額の部分は凹凸がないので、比較的簡単だった。額の部分をはがし終わると、パックは完全に顔から離れて、美和子の指先にぶらりとぶら下がった。美和子は、それをちよつと顔の前にかざしてみても、それからその假面をぶら下げて部屋の隅まで二、三歩歩き、それを屑籠の真上にかざして、そのままぽとりと落した。

「ただ、どうしようもないって、いつているだけよ」

美和子は、いった。

「どうしようもないっていうけどね、お前・  
・  
」

母親が待ちかまえていたように、それにこたえた。

「私みたいなものだって、こうして働いていれば、毎月どうにか暮して行けるんだよ・  
・そりゃあ、楽じゃないよ。毎日五時に起きて、寮の朝食の献立を考えて、それから洗いものだろ、夜の食事のことだって考えなくち

やならないし、買物だって大変なんだよ。人数は多いし、予算は少なし、スーパーの特売を廻って歩いてさ、そうかといって、栄養だって考えなくちゃならないし・・・このごろじゃ、毎朝お父さんと二人がかりで新聞の間のスーパーのちらしに目を通して、切抜きしておくんだよ。別にそのぶん私の得になるわけじゃないけど、社長が喜ぶからね」

「お母さんがむかしから働き者だったってことは、よく知ってるわよ。で、いま、いったい何人分の食事つくってるのよ」

娘は、きいてみた。前にも同じようなことを、同じようなときにきいてみたことがあった。

「十五人分だよ、お前・・・」

即座に、母親の返事が返って来た。

「十五人ていうのは、お前、やってみると大変だよ。盛つけだって、一苦労だしさ。だけど、たまに晩御飯に肉のおかずなんか奮発すると、みんな喜んじゃってね。いまの若い衆



は、肉が好きだからね。おばちゃん、ありがとう、なんていわれると、ついまた奮発しちゃってね。予算オーバーしちゃって、あわてしなくてもいい苦勞をしちゃってさ・・・

「そうね、そんなもんなのよね」

美和子は、わき道にそれた母親の話に、合槌をうった。そして、母親の話がまだまだ続きそうなので、受話器を持ったまま立ち上った。

「それはそうと、ちよつと待ってくれる？」

お母さん」

美和子は、そのまま片手に受話器をぶら下げて、散らばっている着物の間を、来たときと同じように爪先立ちで、鏡台のところまで歩いて行った。そして、化粧台の上を片づけ、その片隅に受話器を置くと、椅子の上の着物をどけて、腰を下ろした。いつもこうしておくと、化粧中でもすぐに電話がとれた。どうゆうわけか、客からの電話は化粧中にかか

つて来ることが多いような気がして、それでコードも五メートルのをつけてもらった。それでもまだ、客からの電話は、風呂に入っているときとか、パツクをしている最中とか、そんなときばかりのような気が美和子はする。

「はい、いいわよ、お母さん」

電話器のセットが一段落すると、美和子はいった。

「ちよつと化粧台の方へ移動したのよ」

「話をもどるけれどねえ、お前」

待っていたように、母親はいった。

「それで結局のところ、その小説の方はどうなっているんだよ、いったい。もう何とかかっていう本屋さんに行って行くのかい？  
結論はでたのかい？」

「あゝ、出版社のこと・・・」

美和子は、化粧台の抽出しをあけると、化粧品を瓶を一つ一つとり出し、化粧台の上にならべながら、前ここみになって、鏡にうつつ

た自分の顔と向いあった。

「出版社のことなら、もうとっくに持って行ったわよ。持って行ってから、もう三カ月にはなるわ」

「三カ月？　もうそんなに前の話なのかい？

この前の話じゃあ、つい最近のこのようにいったたじやないの。それで、何か返事はあったの？　少しは見込みがあるの？」

「だから、何もないっていつてるじやないの。多分、出版社の方じゃあ、まだ読んでさえいないんじゃない。あの人がいうには、持って行って半年で返事が来るのは、まだ早い方なんですってよ」

「へえ、そんなに先のことなのかい？　それじゃ、いつになるかわかったもんじやないじやないの。この前、それさえのれば、っていつていたのはお前の方だよ。だから私は、てつきり今日、明日のことだと思っただよ」

「そう、それさえのれば、っていったのは嘘じやないわ。だけど、それは先の希望ってこ

とよ。先の、先の、希望の話だわ」

「先の希望なんて、どうだっていいよ。じゃあ、なにかい？　あの人は、それまでの間いまままで通り、何もしないでいるつもりなのかい？　」

「多分、そうでしょうね。あの人の机の上には、いつも真白な原稿用紙がのっているわ。それこそ、先の、先の希望みたいだね。わたし、毎日一度はそれをのぞいてみるのよ。だけど字が書いてあったことは、一度もないわ」

「どこか偽き口はないのかねえ」

母親は、いった。

「そりゃあ、あの人の場合は、いちど事業に失敗し、少し足が悪いつていうハンデはあるだろうけど、それでも本気で働く気になれば、どこかに偽き口ぐらいあると思うんだけどねえ。例えば小説を書く人なら、もっとやさしい小説を書くとか、アルバイトを見つけないとか・・・」

「やさしい小説を書くんですって、アルバイトを見つけてるんですって……どれも、駄目よ。あの人を雇ってくれる会社なんて、あるもんですか。新聞の求人広告をみてごらんなさい。どれもみな五十歳までがいいところよ。五十を過ぎて、足が悪くて、始終むずかしいことばかりいつているような男なんて、雇うところがあるもんですか。およそ現代的でないのよ、あの人は……いまの時代には、徹底的に不向きなのよ」

美和子は、片手に持っていた受話器を、器用に肩と顎の間で支えると、両手で乱暴にお白粉を顔にはたき始めた。顔を鏡の方に近づけると、はたいたばかりのお白粉の下から、無数の小皺がのぞいて見えた。人間の顔というより、動物の皮膚がそこはむき出しているような感じだった。「お前のいつていることは、無能だったことと同じじゃないの」

受話器の向うでは、母親が執拗にいつてい

た。

「なら、どうして別れないのよ。私は別れることにちっとも反対じゃないわ。だいたい健の教育にだってよくないでしょ。毎日、父親が家で何もしないでぶらぶらしてて、母親の方が夜働きに出ているなんて・・・」

「そりゃ、いいはずはないわよ。あの子だって、もうあの人が本当の父親でないことは知っているし・・・でも不思議にあの子のことについては何もいわないわよ」

「いわなくたって、腹のなかではそう思っているよ、もう高校なんだもの・・・」

「健は、だけど、おかげで真面目な子よ。勉強の方は、いまひとつだけど・・・」

美和子は、お白粉をはたき終ると、今度は顔をできるだけ鏡から遠ざけてみた。そうすると、動物の皮膚は、完全にお白粉の下にかくれていた。だが、それでも今日は、お白粉のりが何となくよくなかった。気分のせいかも知れないが、ふだんは均等なはずのお

白粉が、何となく今日はまだらに見える。おまけにお白粉だけはたいて、口紅も眉墨もマスカラもつけないと、お白粉だけが奇妙に鏡のなかに浮きあがって、それが、ふだん眼鏡をかけなれたものが眼鏡をはずしたときのように、自分の顔をどこかポイントのない、のっぺりした顔に見せた。

美和子はその起伏のない、平坦ななかにならずかに盛りあがって見える眉の部分に、注意深く眉墨をはいて行った。

「あっ、そうそう・・・」

その美和子に、受話器の向うで母親がいつていた。

「お父さんのこと、もうお前に話したっけね

」

「お父さんのこと？ 病気のこと？」

「就職のことだよ。病気の方は、何たって発作で倒れたんだからそう簡単に治りやしないけどね。こんど電気屋さんに就職したんだよ。お隣りの長谷さんの紹介でね。お父さんは

あまりのり気じゃないらしいけど、少しは我慢してもらわないとね。それに、お父さんの体には、もう魚屋の仕事は無理らしいよ。どうしたって冷たいものをいじくるからね。それがお父さんの体には、いちばんよくないらしいんだよ。電気屋さんでいっても、お父さんの仕事は配達でね。給料はたと貫えないけど、それでもずいぶん助かるからね・・・

「そう、それはよかったわね」

美和子は、いった。いいながら、できるだけ顔を鏡に近づけて、両の眼の玉だけを下に向け、瞼を上を持ちあげるようにして、注意深く睫にマスカラを塗った。

「要は気の持ちようなんだよ、お父さんの場合だって・・・本人に品物の名前がわかんないで、始終間違ったものばかり配達しなくちゃならないなんて、ぶつぶついつてるけどね。何たって、最近は電気製品でいったって、昔とちがって種類が多いだろ・・・」



「そうね、そうかもしれないわね」

美和子は、いった。いいながら、半分は母の話を書きいていなかったことに気がついた。鏡のなかには、口紅をのぞいてもうほとんど化粧のできあがった顔があった。口紅のないその顔が、厚めの化粧のせいか、どこか不健康に見えた。娘のころの美和子は、ほとんど化粧などしたことがなかった。化粧の濃いは、本当はむかしからあまり好きではなかった。好きでない、そういつていられるだけの自信もあった。それは、最近では、美和子が毎日のようにそう思いながら、鏡のなかで見ている顔だ。もう何年ものあいだ、見つづけてきた顔だ。それは、自分の顔のようではない、そうでない顔でもある。まだ未完成の顔のようで、ひとつの結末のような顔でもあった。

突然、美和子のうちで、絶望が首をもたげた。もう終わってしまったものを、まだ抱きしめているような、思ってもみない空しさが湧

きあがった。鏡の奥に、ぽっかりとあいた、暗黒のようでもあった。あらゆるものが、寄ってたかって、急に美和子の前にひらいた深淵のようでもあった。

「わたしだって、何もこんなことしたくはないわ、お母さん！」

美和子は、叫んだ。

すべてのものが、取返しがつかなくなった。取返しがつかないまま、進行していた。

受話器の向うでは、母親が一瞬、息をのんだ。深い深い穴のなかに落ちて行く物体の静寂に、二人は耳をすませた。

「もしもし・・・もしもし・・・」

だが、やがてその静寂のなかから、辛抱強く這いあがって来るような、母親の声がかきこえた。

「それで、今日電話したのはねえ・・・やっぱり今度の日曜日、私がそっちへ行ってあの人と話した方がいいかどうか、それをお前にきこうと思ってねえ」

「今度の日曜日？」

母親のいうことが、一瞬わからなくて、美和子はいった。

「そうだよ、お前がいったことじゃないか、先週の電話で……。もうあの人とはいっしょにやっけて行く自信がないって……。今度の小説がだめなようなら、いちどこっちへ来て一緒にあの人と話してみてくれって……。」「あつ、そう、そうだったわね」

美和子は、いった。  
たしか、そんな気持ちになったときがあつた。あつたような気がした。いや、もしそういふならば、それはあるときだけではない。いつも美和子が思っていることだ。美和子は、思い出した。あときは、美和子の方が、今日母親がいったようなことを、母親に向っていったのだった。それが、ひどく遠い昔のことのように思われた。すぐそこにあるにもかかわらず、しかし、霧の向うの遠い風景のよう。

「だけど、そのことなら、まだ来もらっても仕方ないわ」

美和子は、いった。

そして、いまいったばかりのことを、もう一度正確にいいなおすように、いった。

「もう、来てもらっても仕方がないわ」

「そうだね、小説の方がそんな先のことなら、どっちにしても、行っても仕方がないね」

母親は、しかし、そんな言葉の変化にはまるで気がつかずに、いった。

「じゃあね、今日はこれで切るよ。健が帰ったら、健によろしくね。小遣いをねだるだけじゃなくて、休みになったら、おじいちゃん、おばあちゃんところにも、たまには遊びにくるようにいっておくれ」

「わかったわ、そういっておくわ」

美和子が、そういい終らないうちに、  
「じゃあね・・・」

。受話器の向うで、母親のいうのがきこえた

そして、美和子の「じゃあね」という声を  
受話器に取り残したまま、向うから電話はき  
れた。

「遠いんだよ、ナンナン、とっても遠いんだ

よー

修三は、いった。

「そうだ、ちょうどいくら歩いてもちっとも近づかないような風景があるだろ。こっちが歩けば歩くだけ、向うが遠ざかって行くようにな・・・。子供のころ、よく遠足のたんびに、そんな経験をしたものだった。俺は足が悪かっただろ、だから歩くのがにが手だったんだよ。目的地に向ってみなが喜々として歩いているときは、俺はよく下ばかり見て歩いていたもんだっけ。そういうふうにして歩く方がずっと疲れないんだよ。少なくとも自分はいま、一歩だけ足を出しているって信じてね。俺にはいま、書くという行為が、それと同じような行為に思えて仕方ないんだよ。いや、書くという行為だけではなくて、あらゆるものが、俺自身の人生を含めてあらゆるものが、そのように思えて仕方ないんだ。それは俺が一歩近づけば、一歩遠去かる。俺がそのものを描き、そのものに辿りつこうとすれ

ばするほど、俺の手から逃れて行くのだ。まるで俺のは、辿りつくべき場所などどうにもないみたいだ。結局だから遠足するときも、俺は景色なんか見たことは一度もない。俺が見ていたのは地面ばかりで、その地面はどれも小石の転がっている均一の地面だったような気がするんだよ」

仔犬は、歩道のわきの叢で立止った。立上って、ちよつとの間、叢の匂いを嗅いだ。トラックが二台、つづけて修三のわきを勢いよく走り抜けて行った。どれも空のトラックで、タイヤが道にはずむたびに、荷台が小刻みに鳴っていた。

道は広がった。片側だけでゆうに三車線はあるだろうか。この辺の道は、どれも幅広く、おまけにトラックのほかはほとんど走らなかつた。それは、埋立地の風景にいかにもふさわしい道で、事実、五百メートルなど先の埠頭でその道は終わっていたが、周囲に高い建物もないせいにか、どこか都会の道とちがって

、道の終りの風景といったものを感じさせた。  
仔犬は、ひとわたり叢の匂いを嗅ぎ終ると、修三の方はふり振らずに、またすたすたと歩き出した。  
「だから俺には、すべてのものが、俺が人生を生きれば生きるほど、ますます俺から遠去かって行くような気がするんだよ。存在に辿りつく、ということとは、つまりそうゆうことなんじゃないだろうか、ナンナン。俺はこのごろ、しきりにそんな気がするんだ。存在に辿りつくということとは、つまり無いものにたどりつく、ということなんだ。存在は、辿りつこうとすればするほど失われて行く。われわれがあるものを描こうとして出来ることは、実際には、そのもの以外のものを振り落とすということだけなのだ。その振り落したものが描写で、そのものはいつもその描写の向うに、厳然として存在するのだ。厳然として・  
・それが大事なことなんだよ、ナンナン。



なぜならば、それはあるものと無いものの接点として、いつも厳然としてそこに存在するからだ。それは、あるもののかたちであると同時に、無いもののかたちだ。だから、この世の中に、あるものは、みんなそのあるとなくというかたちに耐えている。あるとなくということが同時に持つ、なくというかたちに耐えているんだ。そうだ、耐えているんだよ、ナンナン。それぞれの存在の、その存在の故里に耐えているんだ。彼自身のうちに間違いなくありながら、実際には辿りつくことのできない、その存在の故里にね・・・」

仔犬は、修三の二、三步先を、修三を引張るようにして歩いていた。修三の手首と仔犬を結びつけた紐が、修三の前で一杯に張られていた。広い車道をへだてた道の向うは、セメント工場の灰色の塀だった。その塀の向うは、その塀よりもさらに灰色のセメントの山が積み重なっていた。風が吹くと、その粉が埃のように空中に舞いあがった。ときどき、修三

の住むマンションにまで舞い込んで来る粉だ  
。修三は信号のところで立止った。修三が立  
止ると、心得えたように仔犬も立止った。修  
三が行こうとしている公園に着くためには、  
この信号を渡って、それからセメント工場の  
塀に沿って右に曲らなければならない。修三  
は、道の向うの信号の赤い色を、ぼんやり見  
ていた。この信号を渡るとき、修三はいつも  
途中で駆け出さなければならぬ。三分の二  
ほどいったところで、いつも信号が青から橙  
色に変わるからだ。  
「だからね、ナンナン、>あるくってことは  
本当に遠いことなんだよ。生きる、ってこと  
は、だんだんと存在から遠ざかって行くこと  
なんだ。人は死によって存在に辿りつくって  
いうけれど、死なんて本当はどこにも存在し  
ないことなんだからね。だから人は、生きれ  
ば生きるほど、だんだんその存在から遠ざか  
って行くんだ。その存在に、彼の人生を塗り

つけてね・・・俺はいつだったか、街に出て  
思いもかけない感動に襲われたことがある。  
俺がまだ若いころ、生きる上にも、ものを書  
く上にも、いまよりずっと真剣だったころの  
ことだ。そのとき俺は、考えごとに疲れて街  
に出たんだ。俺は街の風景に何も期待してい  
たわけではなかったし、街の風景も特に変っ  
ていたというわけではなかった。だけど俺は  
そのとき、その街の風景のなかに、その街の  
風景の、その見なれた、という感覚のなかに  
、突然、思いもかけない救いを見出したのだ  
。俺は、あるときほど自分が存在のそば近く  
に立っているのを感じたことはなかったよう  
に思う。あるときほど存在を新鮮に、そば近  
くに感じたことはなかったように思う。>ほ  
らみる、みんなそこに在るじゃないか、ちゃ  
んとそこに在るじゃないか、俺はそのとき  
、思ったんだ。>だのに何故、お前は思いわ  
ずらう必要があるんだ。すべてのものが、ま  
るでそこにないかのようにな、どこにも存在し

ないかのように、探し求める必要があるんだ  
・・くってね。そのとき、俺は多分、自分  
の考えに疲れていたんだ。そして、その疲れ  
が、俺を俺自身から間視したのかも知れない  
。そのとき俺が見たのは、まぎれもなく存在  
の明るさだった。すべてのものが存在に向っ  
て聞かされたときの、その明るさだった」  
修三は、歩きはじめた。信号が、赤から青  
に変わっていた。それにつられるように、仔犬  
も負けじと修三の前を走り出した。  
道を渡っているのは、修三たちだけだった  
。このあたりの道が広いのは、決して交通量  
のためではない。このあたりが埋立地で、ど  
の道もここで終るためだ。その広さは、道と  
いうよりは、どこか埋立地特有の荒涼とした  
平坦さを連想させる。道の行き着く先は、ど  
れもわきは埠頭で、あるのはただコンクリー  
トの道と、三つ四つの倉庫らしい建物だけだ  
。埠頭にはときにあまり大きくない貨物船が  
二、三隻泊っていることもある。人はめった

にいたことがなく、その埠頭の海は、修三の  
住むマンションの裏を流れる運河ともつなが  
っている。

「ちよつと待っておくれ、ナンナン」

修三は、道の中央ひある安全地帯に辿りつ  
くと、ちよつと息をついた。仔犬が、そんな  
修三を見上げて、自分も立止ると、尻尾をふ  
った。修三は、道の残り半分を、今度はゆっ  
くちと歩きはじめた。

「だけど、悲しいことに、俺はいまその明る  
さを思い出すことしかできない。そう、思い  
出すだけなんだよ、あの明るさはどこに行っ  
てしまったんだろう、って。いまの俺には、  
生きるっていうことは、ただだんだん存在か  
ら遠ざかって行くようにしか思えないんだ。  
間違ひなく死に向って歩みながら、その死さ  
え遠ざかって行くようにしかね・・・人間  
は、その本質からおえば不在により近い<つ  
てという言葉を知っているかい？　そう、まさ  
にそれなんだ。人間は、生きている間、本当

はどこにも存在しない。少くとも、彼自身にとっては何。人間は、存在に近づこう近づこうとしながら、ますます存在から離れて行く。そして、最後には、彼自身の死という不在のなかに、存在を見出そうとするんだ」

修三は、仔犬を見た。子犬は、修三より一足先に横断歩道を渡り終って、歩道に足をかけようとしているところだった。信号が赤に変わったのか、修三の背中を車が一台走って行った。

修三が行こうとしている公園に行くには、横断歩道を渡って、コンクリート工場の塀に沿って右に曲らなければならぬ。右に曲れば、公園はもうすぐ目と鼻の先だった。修三の妻や息子の足だと、その公園まで行くのに、いつも十分はかからない、という。だが、修三の足だと、たっぷり十五分はかかった。修三は、そんな会話をしたときの、妻や息子の顔を何故かふと思い出した。

「人生には、過去や現在だけではなく、たし

かに未来というものもある。だが、俺にあるのは、未来ではなく、終りだけだ。そして、その終りが、いま俺に、俺の背負うべき宿命を教えるのだ。深く滅びる、という俺に残された唯一の可能性を。およそ人間ほど高く育つものはない、深く滅びるものもない、という言葉を知っているかい、ナンナン。これは人間のもつ二つの可能性であると同時に、二つの同質の権限でもあるわけだ。人間は深淵に至ると同時に、その深淵から転回することも出来る。この二つは、同じ一つの可能性として、人間が神から与えられたものだ。そうだ、ナンナン、もしも神様がいるならばね。だけどナンナン、もしも神様がいないとするならば、この力は存在そのものが存在をそのうちに呼び戻す力でもあるわけだ。死は、人間にとって不在の始まりであると同時に、だから存在の完結でもあるんだよ、ナンナン。人間は、死によって、はじめて>その本質からいえば不在により近い<存在から、存在

ものにかえるんだよ」

修三は、立止った。仔犬は、ちょうど公園の入口の階段にさしかかったところだった。最初のころは、修三が仔犬を抱いて、のぼつてやった階段だ。だが、いまは、仔犬は元氣よくその階段にかじりついていた。さして高くない石のその階段は、それでも仔犬にとっては峽しい山みたいなものなのだろう。その一段一段にかじりつくように登って行く仔犬の姿が、岩場にかじりつく登山者のようにも見えた。

「ちよつと待っておくれ、ナンナン」

修三は、その仔犬の背中に向って、いった。仔犬は、背中をまるめ、修三より五、六段先の階段を、修三を引張るようにして登っていた。本人は本氣で修三を引張っているように思っているのかも知れない、と思わせるような背中だった。

「ちよつと待っておくれ、ナンナン」

修三は、その背中に、もう一度声をかけた



。 足が、重かった。階段をのぼると、殊にそれが急にひどくなった。むかしはそれほどもなかったが、いまでは足を持ちあげるのがやっただ、という感じになる。修三の悪い方の足は左足だが、重くなるのはいつも右足だった。恐らくその右足の方が、左足の分まで背負わなければならぬ重さのためなのだろう。その重さは、あるいはながい歲月の間に徐々に右足の上にのしかかって行ったのかも知れない。修三の左足は、踵がつかない。五歳のころかかった、軽い小児麻痺の後遺症の故だった。その踵は、爾来、修三とは全く別個の存在のように、修三の前に存在した。修三が存在について、あれこれ考えるようになってたのもその故かも知れない。それは別個の存在であるだけではなく、あるときには別個の意志のようにも、修三には見えた。それは修三の一部でありながら、修三のままならない存在だった。それが修三には、ときには人間

存在の原型のようにも見えた。

修三は、いちど中学生のころ、その左足のために何人かの友人から殴られたことがある。

戦争中のことで、修三たち中学生が教練の時間ではじめて銃を手にしたときのことだった。銃を手にしたことで一人前になったような感覚で、修三たちはみなはしゃいでいた。だが、授業がはじまって、銃の持ち方、行進につづいて、駆け足に移ると、修三の肩は銃の重みで修三がいくら注意しても右に傾き、そのたびに隣りの友人の肩にぶつかった。隣りの友人に注意され、そのときは注意しても、またぶつかった。友人は、それを修三がわざとやったと思ったのだろう。放課後、修三はその友人の仲間たちに呼びだされ、かわるがわる彼らから殴られたのだった。そのとき修三は、彼らにあまり弁明はしなかつた。殴られながら、あまり腹も立たなかつた。腹が立つより、悲しみが先に立った。

腕力に自信がない故もあつたが、駆け足のあ  
いだ中、修三に肩をぶつけられ通しだった友  
人の不愉快さの方が、修三にはたしかな存在  
として感じられた。

それは、そのころには、修三にはもう馴染  
みの感情だったのだろうか。子供のころから  
いくどとなくそんなことが重なって、石のよ  
うに固まり、踏みしめられて行く人生がある  
。そんな固まりは、いつも爪先だけで歩く、  
修三の左足のタコの上にもあつた。

修三は、階段の最後の幾段かを登りながら  
、口のなかで「よいしょ、よいしょ」と小さ  
な声を出した。修三より一足先に登った仔犬  
が、階段の上に坐って、修三を見下していた  
。修三は、ときどき、自分が人並みより年を  
とっているのか、人並みなのか、人並みより  
本当は若いのか、自分でもよくわからなくな  
るときがある。修三が仔犬を見上げると、修  
三と眼のあつた仔犬が、勢いよく尻尾をふっ  
た。

それは　公園というよりも、どちらかとい  
えば広場に近いような公園だった。  
階段をのぼり終った修三の前に、その広場  
があつた。一応芝生の広場ということになつ  
ていたが、生えているのはほとんど雑草だつ  
た。いかにも埋立地の一割といったその広場  
を取り囲んで、公園らしい装いをたもつよう  
に、細い遊歩道がついていた。遊歩道は、土  
の道で、そのところどころにペンキの色のは  
げかかった四人掛けのベンチがあつた。もと  
は何色をしていたのかもよくわからないよう  
なベンチで、むしろ色が無いといった方がふ  
さわしいような感じのベンチだった。遊歩道  
のはずれには、それでもお体裁だけの子供た  
ちの遊び場があり、ブランコや滑り台や砂場  
があつて、そこに四、五人の子供が遊んでい  
るのが見えた。それぞれ勝手に黙々と遊んで  
いるのか、それとも距離が遠いせいか、声は  
きこえなかつた。

広場には、そのほかにこれといって公園ら

しいものは何もなかった。広場の中央の部分に、それでも公園らしい装いを出そうと考えたのだろう、何本かの木が植えられていたが、どれも育ちが悪く、先の方から枯れかけているのも何本かあった。関係者の手入れが悪いただけではなく、海から運ばれて来る潮風のせいもあつた。その潮風は、修三の住むマンションでも同じで、修三は引越して来てから何度か鉢植の草花や植木を買って来たが、どれも育ちが悪く、すぐに枯れた。

修三は、この公園に来るたびに、いつも自分がずいぶん遠くまで来たような気持ちになった。遠い土地というだけではなくて、自分が歩いて来た遠い時間、といった感じだった。修三がこの界限に越して来たのは、もう半年も前のことだ。それまでも修三は、何回となく引越しをして来た。そのたびに人生をやり直すような気持ちで、いまの妻と一緒になつてからでも、数回は引越しをした。それはまた、修三にとっては、一つの敗撲のよう

な気持ちでもあった。修三は、その敗撲の気持を抱いて、住みなれた山の手の地を転々とした。山の手を離れたのは、今度が始めてだった。そのせいか、いつもなら引越して一月もすれば、すぐに馴染めたはずの土地に、今度はなかなか馴染めなかった。

いままで修三が住んでいた山の手のマンションは、街から少しはずれた細い道に面していたが、それでもベランダに出ると、はるか遠くに奇跡のように豆粒ほどの富士山が見えた。だが、今度は富士山のかわりに、修三の住むマンションのすぐ裏側を、黒い水をたたえた運河が流れている。その運河は、たえず同じ水をたたえ、交錯する通路のように、すぐ右手の上の方で他の運河と交わり、左手の方では二またに別れて、どこまでが運河でどこまでが海か判然としないまま、埋立地の海につながっている。ときどきその運河を、木場から運ばれる材木が、曳き舟にひかれて、ながい列を作って通って行く。背の低い、平

たい恰好をした浚漉船が音もなく浮び、モーター・ボートがその間を水煙をあげて通って行くこともある。ときにはどこからか釣船が現れて、その上で何人かの釣人が並んで糸を垂れている光景を見かけることもある。

修三は、広場に沿って遊歩道を歩きはじめた。いつもここに来ると、遊歩道を一周し、途中で仔犬を離してやり、修三はベンチで一服する。仔犬もそれを知っているのか、修三が歩き出すと、修三のまわりをはしやいで走り廻った。

「結婚して、家庭をつくり、生まれた子供をすべて受け入れ、世の荒浪にさらわれぬように守り育ててやり、できれば手をとって少し歩いてやること、これが人力でなしおおせるぎりぎりのところだと、私は思っています。・・・そうだ、これはカフカの言葉だ、ナンナ。俺は、若いころこの言葉の意味がまるでわからなかった。この言葉は、カフカがその一生を通じてたえずコンプレックスを抱いて

いた父親にあてた言葉でもあり、社会人として成功した、一家のボスでもあり、精力家でもある父親にあてた、カフカ一流の皮肉の言葉だとも思っていた。そんなことは、いまの世の中ならだれしも容易にやっていることだし、そこに人力でなしおおせるぎりぎりのところを見るカフカが、俺にはただ芸術家としてのコンプレックスの塊のように見えたものだ。カフカは、そのコンプレックスを踏み台にして小説を書いた、俺にはそう見えたものだ。だが、いま考えてみると、その考え方は間違っている。カフカは、その後でいつているんだよ。こんな生活はだれにでも容易に出来るようですが、それは自分でそうするのではなく、>そうなって来る<だけのことなのです。・・・ってね。それが大事なことなんだよ。カフカがここで問題にしていることは、存在としての人間の生き方なんだ。人間は、人間であるよりも先に、一つの存在であるということ、カフカにとってはその問題だった



たのだ。その存在の固さ、その存在の絶対性がね。だから、カフカが見ていたのは、いつも>その本質からいえば不在により近い人間だったのだ。>結婚して、家庭をつくり、生まれた子供をすべて受け入れ、世の荒浪にさらされぬように守り育ててやり、できれば手をとって少し歩いてやること、こんが人力でなしおおせるぎりぎりのところ<というのは、それが人間が存在としての自分を満せるぎりぎりのところ、ということなんだよ。人間は、人間である前に存在であることに耐え、それを満さねばならない。これがカフカにとっては絶対的なことだったのだ。俺の左足が俺に教えてくれたことも、あるいはそれだったのかも知れない。人間は、だれしもそのうちに俺の左足のような存在を抱いている。存在の意味を抱いている。人間にとっては、存在は、それ自体が不條理なのだ。カフカは、そのすべての小説で、それを描こうとした。ある日突然毒虫に変身し、結局毒虫の姿の

まま死んで行く『変身』の主人公がそうだし、何故呼び出されたのかわからぬまま、いつまでも城の主に会うことの出来ない『城』の主人公にしてもそうだし、何のために審かれなければならぬのかわからないまま、犬のようだとなくと思いつながら死んで行く『審判』の主人公にしても、そうだと。＞何故かという問いにわかって、そこにあるものは、いつも絶対だ。絶対という、存在者だ。＞何故かという問いは、その絶対の前では何の意味もなさないんだよ。それは＞生きるかという絶対であるかも知れないし、＞存在するかという絶対であるかも知れない。カフカは、そのことの意味をよく知っていたんだ。カフカにとって、書くということとは、その絶対を超えることだったんだ。カフカの小説では、その現実には耐えるものは、小説の主人公たち以上に、カフカ自身だ。その現実には、どれも比喩ではなく、現実なのだ。カフカの小説を読むと、比喩なんて、畢竟、＞その本質からいえば

不在に近い<人間の、弱々しい武器以外の何ものでもないようにさえ、思えて来る。小説を書くことによつてカフカがしたことは、自分がどこまで小説の主人公たちに課した現実能耐ることが出来るか、試すことだったようにさえ思えて来る。カフカが死にのぞんで自分の作品のことごとくを焼却するように友人に頼んだ、という話もそうだ。カフカはそうすることによつて、真に存在することの厳しさを自らに課したのだ。>犬のようだなくと思ひながら死んで行つた主人公同様、カフカはその存在の厳しさに身を任ねたのだ。人は、だれしも犬のように死に、虫のように死ぬ。カフカは恐らく、そういういたかつたのだらう。犬のように死に、虫のように死ぬ。その深淵に耐える力こそ、真に存在することの意味であることを、カフカはいいたかつたのだらう。存在が存在として、その>ある<ことに耐え、それを満すこと、それこそが人力でなしにおおせるぎりぎりのところだ、と・・

・  
「 修三は、立止った。彼が立止ったというよ  
り、彼の想念が立止ったというように。」

修三が立止ると、仔犬が開放されるのを催  
促するように、修三の足にじゃれついた。

「ちよっと待っておくれ、もうすぐだから。」

・  
「 修三が、その仔犬に向って、いった。まだ  
やっと広場の周囲の三分の一ほどを周ったと  
ころだった。修三がいつも休憩することにし  
ているベンチが、まだずっと前方に見えた。  
ほかのベンチは、たいてい二つずつ肩を並べ  
ていたが、そのベンチだけは一つだけぽつん  
と置かれていたので、遠くからでもそれはす  
ぐにわかった。修三が、いつからか散歩のた  
びにそのベンチに坐るようになったのも、ど  
こかでそれが影響していたのかもしれないかっ  
た。」

「 そうだ、おかしいだろう？ ナンナン・」

・  
「

修三は、そのベンチに向って再び歩き出しながら、いった。  
「だって、俺はいまでも心の底では、カフカのいうその>人力でなしおおせるぎりぎりのこと<を、だれしも容易に出来ることだ。と  
思っていることに気がつくことがあるんだよ。  
。俺自身、現になにひとつそれにふさわしい  
ことが出来ないくせしてね。いや、カフカの  
いう>ぎりぎりのこと<ではなくて、ただ単  
に、現実に妻や子を養うことさえね。これは  
、どうゆうことだと思う？ ナンナン。そう  
だ、貧しいということなんだ。その貧しさを  
経験することが出来ないほど貧しいというこ  
となんだ。乏しき時代は、深夜に至れば、そ  
の乏しさを経験することすら出来ない。それ  
なんだよ。いまの俺は、その貧しさを経験す  
ることが出来ないほど貧しい。俺は、いまは  
存在の岸辺を遠く離れて、海を漂っている。  
俺の海を埋めているのは、ただ涯てしない拡  
がりだけだ。涯てしない、平坦な波だけだ。

だが、俺はそれでも、その涯てしない平坦な波の拡がりのなかに、ときどき転回を夢みることがあるんだよ。変な話だろ、ナンナン。俺が夢みるのは、その拡がりのうちに潜む深淵なのだ。その深淵からの転回なんだ。犬のように死に、虫のように死ぬ、その深淵、俺はそこに救いを求めているのかも知れない。ナンナン、俺がときどきお前のうちに、何よりも身近なものを感ずるのも、そのためなんだよ」

修三は、ベンチに歩み寄った。ベンチは、ひどく傷んでいた。昨日と同じように、ひどく傷んでいた。それは、子供のころ遊園地や動物園でよく見かけた、細い木の板を並べて打ちつけただけの、四人掛けのベンチだった。木に塗られたベンチは、ほとんどはげ落ちて、その下から灰色の木目がのぞいていた。むかしは空色をしたベンチだったろうということは、残ったベンキの色から辛うじてわかったが、いまはその木目の色が

、ベンチの色のように見えた。

修三は、そのベンチに腰を下ろした。修三が腰を下ろすと、仔犬が待ちきれないよう修三の膝に両脚でとびかかった。

「よしよし、わかったよ、ナンナン」

修三は、その仔犬の上にかがみ込み、仔犬の首から紐を解きながらいった。

「さあ、行っておいで、思い切り走りまわって来るんだ」

修三が紐をとき終ると、仔犬は待ちかねたように広場に向って走り出した。

修三は、ベンチに背をもたせかけた。ベンチの背に渡された、ごつごつした固い木の感覚が、すぐに背中に戻って来た。

広場の光景は、いつ見てもまったく同じ光景のように見えた。土曜か日曜のほかはほとんど人のいたためしのないせいか、それは光景というとりは、何か索漠とした、放置された空間を感じさせた。

西日が、そこにあたっていた。すでにだい

ぶ西に傾いた、秋の陽だった。それは緑とい  
うよりは、もうだいぶ茶色の色彩にちかい広  
場の上に、その光を落していた。弱々しい、  
震えを帯びた、橙色の光だった。その色調に  
、草も木もくるまれていた。

修三は、その色調のなかで、走り廻ってい  
る仔犬を見た。仔犬だけが、生きものの喜び  
を表わしているように見えた。生きているこ  
との喜びで満されているように見えた。仔犬  
はときどき草の間に姿をかくし、また勢よく  
現われては、急に立ちどまって、今度は修三  
がいるのを確認するように、修三の方をふり  
返ったりした。顔を覆ったながい毛で、遠く  
から見ると、どこが眼で、どこが鼻かよくわ  
からなかった。その顔に、草のきれはしが、  
いくつかぶら下がっていた。

修三は、その毛の奥の眼を思い浮べた。そ  
の顔から想像するより、ずっと大きな、澄ん  
だ眼だった。人間の眼からくらべると、はる  
かにまるい、茶色の瞳だった。修三は、その



瞳が、いつも修三がふと気がついたとき、問  
いかけるように、じつと彼の方を見つめてい  
ることを知っていた。人間の瞳にはない、見  
つめ方だった。何を問うというのではなく、  
問いがその全体からあふれているような見  
け方だった。修三は、その屈折のない問いに  
、ときどき>ものくに直接ふれている瞳を感  
ずることがあった。その瞳は、修三に触れて  
いた。自分が仔犬を理解するというより、ど  
こかまったく別の世界で、自分が仔犬に理解  
されている、といった感じだった。どこかに  
ひろい、大きな場所があつて、その場所に、  
自分も仔犬もくるまれている、といった感じ  
でもあつた。

「『馬は笑えるか』っていう小説あつたな  
」  
修三は、いった。

「だれの小説だったかな、とても短い小説だ  
つた。動物は笑うことが出来ない、という動  
物学者の通説に対して、その作者は間違いな

く馬が笑うのを見た、っていうんだよ。軍隊で馬丁が馬を洗っているときの話で、馬丁が鉄櫛で馬の股の内側をこするたびに、馬が何度もくすぐったがって、歯をむき出して笑った、っていうんだ。それで、その作者はこういう結論を出したんだ。動物は笑うことが出来る、ただしユーモアやウィットで笑うことは出来ない、ってね。

俺は、お前を見てみると、ときどきこの小説を思い出すんだ。俺は、お前が本気で怒ったのを一度も見たことがない。だれに対してでも、お前はいつも勢一杯尾をふって近づいて行く。本を読むと、お前の先祖の発祥の地はチベットで、中国の宮廷に献上され、それ以来中国で宮廷の愛玩用の犬として飼われて来たと書かれているが、あるいはそのながい歴史の間に、愛玩用の犬としての習慣が身についてしまったのだろうか。だけど、そんなお前に、もし心がないといたら、それは間違っている。お前には、心もあるし、感情も

ある。俺にはその心が、ときには人間よりもずっとやさしいし、繊細でさえあるように思えるときがある。

いつだったか、夏の暑い夜に、お前は俺の蒲団のなかでじつといつまでも抱かれていたときがあったね。あるとき俺は、お前がいつまでじつとそうして我慢してられるか、わざと様子を見ていた。俺には蒲団のなかがお前にとって暑苦しくて、決して寝やすい場所ではないことがよくわかっていた。

だが、意外にも、お前は俺が起きているあいだ、俺の腕のなかでいつまでもじつとしていた。あるときお前は、俺に気をつかって、じつと辛抱していたのだ。俺がためしに寝た不利をしてみると、お前は俺が寝たかどうか様子をうかがって、そつと蒲団から抜け出ようとした。片足をそれこそ少しずつ、そつとずらすようにして、首をすくめてね。そして俺が目を覚まして、「こら、ナンナン」といったとたんに、いたずらを見つけられた子供

みたい、その場に這いつくばってしまった  
つけ。

あ、のとき俺は、たしかにお前の心を感じた  
のだ。お前のやさしさをね。人間は、犬たち  
が人間を理解しているより、あるはずと  
犬たちを理解していないのかも知れない。俺  
は、そう思ったんだよ。

だがね、恐ろしいのは、ナンナン、その心  
が、そのやさしさが身を滅ぼすことだ。ってあ  
る、ということなんだ。そうなんだ、ナンナ  
ン。あるものにとっては、やさしさというの  
は低級な感情で、低級な動物ほどやさしさを  
持ち、そのやさしさのうちに身を滅ぼして行  
くんだよ」

仔犬は、少し遊びつかれたのか、草むらの  
間に這いつくばって、じっと修三の方を見て  
いた。そうしていると、仔犬もまた修三の方  
を見て、何か考えごとをしているようにも見  
えた。

修三は、この仔犬を買ったとき、いつかこ

の仔犬とこんな交流をするようになるうとは、夢にも思っていなかった。修三は、ほんの心のはずみで、この仔犬を買ったのだ。そのとき、仔犬は、犬屋の店頭の檻の片隅に、一匹だけ黒い塊のようにうずくまっていた。修三たちが店に入っても、じっと動かずに眼をつむって、生物というよりも、どちらかという物質にちかような印象だった。その日、修三は、友人に誘われて犬屋に行った。たまたま訪ねた友人がシーズの雄を飼っていて、それにふさわしい雌を探しに犬屋に行くというのに一緒につきあつたまでのことだった。もちろん修三は犬など買う気もなかったし、そんな金の余裕もなかった。だが、その修三がその日それでも黒い塊を買う気になったのは、金なら貸しといてやるからといってすすめた友人の言葉もあつたが、ふと、「犬が飼いたいわ」といつかいていた妻の言葉が脳裡をかすめたからだ。修三自身、別にその黒い塊を可愛いと思つたわけ

ではなかった。だが、その黒い塊を突然眼にしたときの妻の喜びが、たちまち修三自身の喜びのように、修三の胸を満した。修三は、その日、妻には、その仔犬を買ったのではなく、友人から貰ったのだ、と嘘をいった。別に、妻を瞞そう、と思ったわけではなかった。ただ、その修三の胸を満した妻の喜びが、できるだけ純粹であってほしい、と思っただけだった。それが純粹な生物として、何ものにも邪魔されずに残ってほしい、と思っただけだ。

「俺はいつもそんな嘘ばかりついてきたような気がする」

修三は、ベンチから立ち上った。

「その嘘が、霧のように俺の人生にしみ渡り、霧のように、俺の人生をくるんでいる」

修三は、草むらの間から相変らず修三の方をうかがっている仔犬を見た。

修三が仔犬を呼ぶと、仔犬は一目散に修三めがけて走って来た。いまは修三に向って走

ること、それだけで十分に喜びに満されている  
とでもいうように、それは草むらのなかをま  
りのように弾んでいた。

仔犬は、修三の足もとまで来ると、きちん  
と両脚をそろえて修三の前に坐った。そして  
、首が痛くなるのではないかと思えるほど首  
をもたげて、立っている修三を見あげた。ま  
だ十分に生えそろわない小さな尻尾が、左右  
の草をはらっていた。

「ナンナン、お前はいつ見ても満されている  
なあ」

修三はいった。

「俺はときどき思うんだよ。俺が持たなくて  
はならないのは、お前の眼かも知れない、つ  
て。お前の眼には、俺はどんなふうにつつ  
ているんだろうかって・・・」

修三は、仔犬のうえにかがみ込んだ。

「お前の方が、本当はずっと俺より＞ものく  
を見ているかも知れない」

修三は、仔犬の首にふたたび紐をかけなが

ら、いった。そばで見ると、仔犬の眼はほとんどまんまるに見えた。その眼が、ながい毛に覆われた顔の奥から、じっと修三を見つめていた。

「お前の瞳は、いつも<もの<たちの映像をくつきりと寫し出す。俺はいちど、お前の瞳に映った俺の映像に気がついてびっくりしたことがあるんだよ。まるで俺が本当にお前になかにいるみたいだね・・・」

修三は歩き出した。広場には、すでに夕暮がたちこめていた。隅の光は、さつきよりさらに弱まって、日射しというよりは、靄にちかかった。まだかすかに橙色を残して、それはそこにあるあらゆるものをくるんでいた。そのなかで、中央の木々の梢に、かすかに灰色が忍びよりよく見ると、それは草の上にも音もなくひろがっているように見えた。

修三は、その風景のなかを、最後のグラウンドを一周する走者のように、歩き出した。



修三の前を、仔犬がピンと尻尾をたてて、歩いていった。

「われらがこの世にあるは、おそらくはいうためだろう。

家、橋、泉、門、壺、果樹、窓、と――せ  
いぜい円柱、塔と・・・

だが、理解せよ。おゝ、ものみずからがいまだかつて、かくも真実にあるのだとは思わないように、言うためだ」

修三は口ずさんだ。

「そうだ、ナンナン、俺が求めているのは、一日が夜明けのように暮れて行く、そんな>時  
くかも知れない。それは、存在の黄昏の時、  
夜明けのときだ。そこには、始めもなければ、  
終りもない。期待もなければ、絶望もない。  
。人は、生きてただけ終りに近づいているわけ  
でもなく、始めから遠去かっているわけでも  
ない。始めは、終りと同じように、すぐそこ  
にあるのだ。幼年時代のように、子供のころ  
のように、そこにあるのだ。存在は、だれそ

もにとつて、みな同じ近きにある。だのに何故、人は黄昏のなかに、来たるべき夜しか見ることが出来ないのだろう。存在の>時<から、遠く離れて生きることしか出来ないのだろう。」

修三は、立止った。ちようど遊び場にさしかかったところで、砂場で遊んでいた子供たちの一人が、修三のところに寄って来た。ほかの子供たちも、ちようど家路につくところだったのか、それにつられるように修三のところに寄って来た。

子供たちは、仔犬を取囲むように、修三と肩を並べて歩き出した。

「おじさん、この犬、噛まない？」

なかの一人が、いった。

「あゝ、噛まない、絶対に噛まないよ」

修三が、こたえた。

「じゃあ、この犬、吠える？」

別の一人が、いった。

修三は、ちよつと考えた。

「そうだなあ、うれしいとき以外は、めつたに吠えないな」

「めつたに吠えないの？　じゃあ、この犬、  
唾だあ・・・」

子供の一人が、はやしたてるように、いった。

「唾じゃあないさ、ただ、とつても人間が好きなんだよ」

修三は、少しむきになって、説得するよう  
にいった。

仔犬は、子供たちを見たときから、はしやぎまわったいた。尻尾を大きく左右にふつて、子供たちの一人一人にとびかかろうとしたり、修三の足にじゃれついたりした。

子供たちは、修三と並んで歩きながら、そんな仔犬を遠まきにしていた。そして、ときどき仔犬の方に歩み寄っては、仔犬がとびつくくと、あわててとびのいたりした。

「ねあ、この犬、噛まない？　本当に噛まない？　」

やがて、最初に修三にきいた子供が、もう一度、念を押すようにいった。子供たちの眼が、いつせいに修三の顔をのぞき込んだ。「あゝ、噛まない。だからいったら、口のなかに手を突込んだって、噛みやしないよ」

修三は、いった。

子供たちの一人が、修三のその言葉で、意を決したように仔犬の方に歩み寄った。それからその子は、喜こんでとびつこうとする仔犬の頭をポンと叩いた。

「ほんとだ、ほんとだ、噛まないや」

子供は、いきなり公園の方に向かって走り出しながらいった。ほかの子供たちも、それを見て、いつせいにそれに見ならった。

「ほんとだ、ほんとだ、噛まないや」

子供たちは、口々にそうはやしながら、仔犬の頭をぽんぽん叩いて、公園の出口の方に向かって走り出した。子供たちは、走りながら、ときどき仔犬の方を振り返った。

仔犬は、子供たちと一緒に、修三を引張る

ようにして、二、三步走り出した。それからあきらめたように立止って、修三を振り返った。さっきまで大きく左右にふっていた尻尾が、いまは名残りのように、揺れていた。

修三は、子供たちの背中が、一つずつ急角度を描きながら、公園の出口から消えて行くのを見送っていた。子供のころよくやった憶えのある、両手をひろげた、飛行機の真似のような走り方で、その背中が、大きく斜めに傾いていた。

——あなたの小説のいわんとしていることがわからないわけではないんですけどねえ・・・われわれが求めているのは、もっと現実的なことなんだなあ・・・——

公園を出、再び横断歩道を渡りはじめたとき、修三は、そんな声をきいたように思った。

——えっと、あなたの人生とか、あなたの現実的苦しみとか・・・——

修三の前に、修三より少くとも十歳は若く

見える編集者の、いたわるような微笑を浮かべた顔があった。

十日ほど前、修三が原稿を持ち込んだ出版社を訪ねたときのことだ。修三が訪ねると、顔見知りのその男は、修三を出版社の下の喫茶店に案内し、二人の間のテーブルに修三の原稿を置くと、片肘を椅子の背にもたせかけるような恰好で、膝を組んだ。

「あなたにとっては何んなことはどっちでもいいことかも知れないけど、結局そう思うこと自体が、逃避なんじゃないですか。やっぱり小説が描かなくてはならないのは、人間ですからねえ。あなたの小説は、その人間そのものから眼をそむけているような気がするんですよ。そりゃあ、>もの<というか、存在というか、そうしたものを描こうというあなたの意図は、わかりますけどねえ・・・」

最近、ふとっちやっつてね、といていたその男は、この前もらった名刺に、編集次長という肩書きがついていた。修三は、その男の

なかに、ふと、過去から未来に向って流れて行く。時々の蓄えを見た。その男は、その暮らしのなかで、ゆったりと椅子に寛いでいた。「ぼくらは、あなたの人生から、もっと別のものを期待しているんですけどねえ。そんな存在なんかじゃなく、あなたの渡って来た人生というか、現実そのものの厳しさをね。・・

それから、その男は、その言葉にはあまりそぐわない微笑を咳払いをして浮かべたまま、つけくわえた。

「もっとも、これはぼくの意見ですよ。本当言うと、いま編集長にも一度読んでもらおうと思っていたところで、だから結論の方は、もうちょっと待ってみてくれませんか。・・

この作品は、載らないな、そのとき、結論のように彼は思った。彼とその男との間に置かれたその原稿が、ふいに宙に浮いたような印象だった。彼のもとを離れ、その男のもと

を離れて、それはどこか彼自身も手のとどかない場所に行ってしまったような印象だった。宙に浮いている、ということが、一つの結論でもあるようだった。その結論が、再びその原稿を脇にはさんで修三のかわりにコーヒ―代を拂っている、その男の急に幅ひろくなつた背中にもあつた。

「まだ結論が出ないんだよ」

その日、修三は妻にいった。いいながら、それがまた、彼の人生そのものの結論でもあるような気がした。結論が出ないという結論を背負った人生、それが何故かちがたい、固い物質のようにも感じられた。

マンションに着くと、修三は、部屋までエレベーターで行こうか、階段で行こうか、ちよつと迷った。

修三の住むマンションは、公営団地で、運河を背にした埋立地の一角に、どれも同じような十一階建の建物が、幾棟も同じ方向に向つて建っていた。修三の部屋はその一番は



ずれの建物の四階だった。

修三は、エレベーターの前に立ち、上の階にのぼりはじめたばかりのエレベーターの矢印を見てから、足許の仔犬をうながして、しぐ横手にある階段の方に向った。

修三の足で四階まで階段をのぼるのは、決して楽ではなかったが、そのかわり、階段をのぼりきり、通路に出ると、運河が見えた。どうゆうわけか、公団が建てたというこの建物は、せっかく運河のそばに建ちながら、そのどれもが運河に背を向けるようにして建てていた。運河に面した建物もないし、部屋の窓から運河が見えるような部屋も、一つもなかった。修三が階段をのぼったのは、だから、階段をのぼり終るとその労苦の報酬のよう修三たちの生活に飛び込んで来る、その運河の光景が、たまらなく好きだったからだ。

いつか修三を訪ねて来た友人の一人が、まるで香港のようだな、といったその運河は、

いつも黒いとしかしいようのない、沈った水を満々とたたえていた。だが、その水は、生活のなかでよく見ると、決して黒いわけではなく、見るたびにその色あいを少しずつ変えているのが、わかった。それは、自然というよりは、修三には、一つの生きものの表情のようにも見えた。

その水が、深い緑のなかに沈み、かすかに波うっているときもあれば、濃紺の表を浮べ、鏡のように横たわっているときもあった。どう見ても銀色としか見えないときもあったし、ときにその上に空が映り、どの色が水の色かわからぬほどに、河の水と熔けあっているときもあった。またその上をさまざまな船が過ぎ、その水脈のたてる連波が、ひそかな囁きのように、その色あいの間を縫って、さまざまな紋様を描いていることもあった。だが、その日、修三が階段をのぼり終わったとき見た光景は、それらのどれともちがっていた。

それは、階段をのぼり終ったとたん、思わず修三が眉をしかめなければならなかった。どの、光の海であった。光の洪水であった。さつき修三が公園で見た、あの弱々しい秋の陽の、いったいどこにそのような光がひそんでいたのだろうか。どこからそのような光の泥濘が生まれ、集中が生まれたのだろうか。それは、いま、運河の本当の色など、本当はどこにも存在しないことを修三に告げるかのように、運河の上にふり注いでいた。運河の上に集中し、躍り、きらめき、そしてあたりに拡散していた。運河の水がそれを弾き、黄金色に輝いていた。その上に、浚渫船が浮び、音もなくすすむそのかすかな動きにつれて、連波が光の粒をまき散らし、ある部分では、光の帯となって、きらめいていた。その向うには、修三がここに越して着たときから建ちかけた姿のまま少しも変らぬ、骨組だけの鉄骨の建物があつた。いつ見てもその建物以外には何もない、いかにも放置されたとし

か思えないその光景も、いまはその光の余裕に  
くるまれて、黄金色に輝いていた。

修三は、その光のなかで、思わず立ちつく  
した。

いったい、このような光が、このような力  
が、どこに潜んでいたのだろう。それは、あ  
の公園で見た弱々しい光のうちにだろうか。  
それとも、いま修三が目になっているこの一握  
りの自然、いや、自然とさえいいがたい一握  
りの存在、その存在のうちにひそむあるく  
ということのうちにだろうか。

修三は、その光のなかを部屋に向って歩き  
出した。どれも拒絶するように並んでいる、  
重たげな鉄の扉の、四つ目の扉で、修三は立  
止った。

「さあ、ナンナン、元気よく入って行くんだ  
ぞ、思いきり尻尾をふって、思いきりうれし  
そうに走って行くんだ」

修三は、その扉に手をかけて、いったい。

修三が扉をあけると、足もとの仔犬が、待

つていたように、わずかな隙間から部屋のなかに飛び行んで行った。そして、修三が扉をあけ終わったときには、その姿はたちまちのうちに、部屋の奥へと消えて行った。

「あーら、ナンナン、ナンナンちゃんじゃないの」

すぐに、その部屋の奥から、弾むような美和子の声がきこえて来た。どこかに、だれかほかのものがいて、囁っているような声でもあった。

「・・・そう、ナンナンちゃん・・・お散歩に行つて来たの・・・いま帰つて来たの・・・それで、お散歩は楽しかった？・・・まあ、まあ、そんなにうれしいの？　それはよかつたわねえ・・・本当に、よかつたわねえ・・・」

